HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パレート社会主義論の形成
Author(s)	佐藤, 茂行
Citation	經濟學研究, 41(2), 1-11
Issue Date	1991-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31880
Type	departmental bulletin paper
File Information	41(2)_P1-11.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 41-2
北海道大学 1991.10

パレート社会主義論の形成

佐藤茂行

パレートは，社会主義の主張を，真理性の面と社会的効用の二つの面から考察している。真理性の面からすると，社会主義は多かれ少なかれ形而上学的理論とか疑似科学的理論の特性をもっている。他方，社会的効用の面からすると，社会主義は，主にエリートの循環を促進する役割を果たす。たとえば，パレートの同時代にあって，それは旧エリート（ブルジョワジー）にかわる新エリートのイデオロギーとして機能する一方，社会主義運動に迎合するブルジョワジーのイデオロギーとしても働くといったように。

パレートが，こうした二つの側面のうち，主として真理性の面にかんして社会主義を批判する『社会主義体系』(1901-1902) の公刊意図を抱いたのは1899年である。パレートを，この大著の執筆に駆り立てたのは，当時のヨーロッパ諸国の社会主義運動の著しい高まりにたいする危機感と，この運動に対抗するどころか，自殺的とも言える迎合的態度をもってこれに対処していた支配層への忿懣であった。

パレートは，1889年から1906年にかけて，当時の社会主義運動にかんする多くの論説を新聞や雑誌に発表している。1898年頃から『社会主義体系』の出版の頃にかけては，とりわけイタリアでは社会主義的潮汐の高まりがピークに達した時期であった。

本稿では，『社会主義体系』を読み解くうえで重要な資料となる，この時期の社会主義にかんするパレートの時事的論説を中心に検討してみたい[1]。

社会主義論の形成

パレートが社会主義と言うとき，広い意味では，国家統制，とりわけ富の分配への国家の介入を図る主義主張を指している。パレートは，そうした広義の社会主義を1891年の段階では拘束主義(vincolismo)という用語を使って表現している。したがって，特定のブルジョワジーに有利な分配を目指す保護主義と，これと結びついた租税政策なども拘束主義つまり広義の社会主義ということになる。

自由主義者としてのパレートは，最初，このような保護主義への批判から出発して，その批判を，貧乏人に有利な分配を主張する，いわゆる狭義の社会主義へと拡大していく。そして，当時のパレートには，保護主義政策をとる政府の「ブルジョワ社会主義」または「国家の社会主義」こそが，当面もっとも危険な，主要な批判の対象と思われたのである。

パレートが社会主義を意識し始めたのは，選挙法改正で1882年に社会主義者が初めて議会に進出した頃からである。それ以前には，パレートのマルクス主義や社会主義にかんする言及は

1）出典については略号を用いてある。たとえば，(OE II 123)というような表記は，パレート全集，第2巻，123ページを表す。これとは別に，(TR 123) とか (SY II 123)，(LP II 123) といった表記は，TR は『一般社会学概論』，SY は『社会主義体系』，LP は『パンタレオーニ宛書簡集』を示し，その後のローマ数字は巻数を，アラビア数字は，TR については小節数，その他はページ数を表す。

稀であり，あったとしても当たりさわりのないものであった[2]。

ところで，イタリアでは，社会的経済的条件の変化によって，1896年から1900年初めにかけて，抑圧され続けてきた都市と農村の勤労大衆の不満と要求が，未曾有の規模のストライキのかたちをとって爆発する。このようにして，社会運動の奔流がイタリア全土を覆うに至るのだが，当然のことながら，それに応じて1890年代末頃から社会主義者の活動も活発になる。だが，1904年から1905にかけて，社会主義の「良き理解者」でもあるジョリッティが首相の座につく一方，いわゆる妥協的な社会主義者が運動の主導権を握るようになり，社会主義運動は分裂し，その限りで社会主義の脅威はいちおう減退の方向をたどることになる[3]。

さて，このような経過のなかで自由主義者パレートは，1898年のミラノ事件を契機として，一時，社会主義者との政治的連帯を深めはするが，社会主義者にたいするパレートの基本的評価は，ほとんど変化しなかった。その基本的評価というのは1891年に発表された「社会主義と自由」という論文のなかに示されている。それは，社会主義が強制力（国家権力）をもって，直接，間接に個人の自由な活動を規制し，富の分配を貧乏人に有利なように変化させるという見方である。つまり，社会主義は，思想的にも経済的にも自由主義の立場とは根本的に相容れないというのが，パレートの社会主義にたいする基本的評価だったのである。

この論文でパレートは，まず社会主義の特質について，こう述べている。

> ［社会主義の目的は］「つねに貧乏人を助けようとして国家権力の増大と個人の自由の縮小を図りながら，われわれの社会の内部的な革新，とりわけ所有の基礎，そして，さらに家族の基礎の変革を目指すところにある。」(OE XXII 376)。

パレートは，このように社会主義が「富の分配を変化させるために国家の介入を望む」ことから拘束主義(vincolismo)の一種であると定義する。そして，その社会主義と並んで，もう一つの立場を，この拘束主義のなかに含める。「商業的保護貿易主義および社会秩序の軍事的タイプを擁護する」立場がそれである。この立場の後半は，後に軍国主義と表現されている。ともあれ，支配階級つまりブルジョワジーの一部に有利なように富の分配を変化させるために国家の介入を図る，この，いわば軍国主義と結びついた保護主義の立場をパレートは「ブルジョワ社会主義」と呼んでいるのである（*ibid*. 384)。

ここで注目すべきことは，パレートが，国家の介入による富の分配を目指す点で社会主義と保護貿易主義は共通すると考えて，両者を拘束主義という名称で一括し，その拘束主義に「富の分配を自由競争に委ねようとする」自由経済論者（liberisti）の立場を対置させていたことである。

また，この論文のなかで興味深いのは，拘束主義との関連でパレートが示している社会主義にかんする，以下のような見解である。その第一は，すでに見たように社会主義を主として富の分配の観点からとらえていること，第二は「近代国民のあらゆる政府」が，いまや金持ちに有利なように富の分配を変化させる一つの「ブルジョワ社会主義」の制度となっているという主張（*ibid*. 377, 384），そして第三は貧乏人に，もっぱら有利なように富の分配を変化させようとする社会主義者たちが，一般に信じられているほど革新的ではなく，上記の「ブルジョワ社会主義」の組織を多分にまねているという見解である（*ibid*. 384, 387)。そして第一の点からは，パレートの社会主義論が主として富の分配問題への関心から出発している事情が窺われる。また第二と第三の点からは，国家の強制力を直接

2）［1］p. 38。
3）［5］p. 444-468，［8］p. 202-227。

間接に行使することによって分配を変化させようとしている社会主義のモデルが，実は近代の国家主義的な統治制度にあるという独特の見方が確認される。

社会主義党派の類型

上記の論文ではこの他，さまざまな社会主義の理論体系にかんするタイプ分けが試みられているが，しかし，現実の党派については，ほとんど触れられてはいない。社会主義の現実的党派の類型化の試みは，社会主義運動が高まりを見せるようになった時期，すなわち1900年5月に発表された「社会主義的脅威」(Le péril socialiste) という論説のなかでなされる。この論説のなかの類型化は，その後のパレートの社会主義論の前提となっているので，概観しておく必要がある。

パレートは，現実の社会主義の党派を大きく，つぎの三つに分けている。1）科学的社会主義者 (les socialistes scientifiques)，2）非妥協的マルクス主義者 (les marxistes intrangeants)，3）大衆的社会主義 (le socialisme vulgaire) の各党派がそれである。

まず，科学的社会主義者は，少数で，実践的な影響力は，まったくない。この社会主義者のなかには非常に尊敬すべき人物がおり，その幾人かは，非常に有能で，かれらは真摯に真実を追究している。かれらは自分たちが発見した真実が，マルクスの書物と一致しないところから，その一致をうるため精緻をきわめた解釈に専心している。このように，これらの社会主義者は，経済科学の見地からすると，いわゆる歴史学派や，その他の経済学者よりも，はるかに優れているというのである (OE IV 324)。パレートは，ここでは具体的人名を挙げてはいない。しかし，これらの「尊敬すべき人物」が，クローチェ，ソレル，ラブリオーラなどを示唆していることは十分推測される (SY II 323, 324)。

つぎに非妥協的マルクス主義者について。かれらは正統的社会主義者と呼ぶことができる。その数は，かなり多く，その実践的影響力は著しい。かれらは経済学者ではないが，資本の重要性を完全に弁えていて，資本の共同所有を望んでいるというのである (OE IV 324)。

そして，大衆的社会主義。これには，非常に多くの党派があるとして，以下のような社会主義者を列挙している。1）フェビアン主義者，2）キリスト教社会主義者，3）講壇社会主義者，4）衛生学者的社会主義者，5）道徳的社会主義者，6）人道主義的社会主義者，7）急進的社会主義者。

なお，ここで，以上の社会主義の名称に関連して，留意すべき問題を指摘しておこう。それは，この論説のなかでもすでに見られるのだが，これ以後の論説においても，パレートは必ずしも一貫して上記の名称を用いているわけではないということである。まず，非妥協的マルクス主義者については，正統的社会主義者，革命的社会主義者，非妥協的社会主義者という名称が用いられていること。また，この分類にはないブルジョワ社会主義者，妥協的社会主義者という表現が他の論説では見られること。そして，これらのブルジョワ社会主義者とか妥協的社会主義者という表現で，しばしば上記の大衆的社会主義の党派とりわけ急進的社会主義者が指示されていること。さらに，このことから知られるようにパレートは拘束主義と関連した国家の社会主義と妥協的社会主義とを，いずれもブルジョワ社会主義という同一の名称で表現していることである。

最後の点にかんして補足すると，パレートは，前者については近代国家の分配政策にかんする一般的評価を表すため，また後者については現実の社会主義者の党派の特性を示すために，それぞれブルジョワ社会主義という言葉を用いているのである。後者は，たしかに支配階級に有利なように富の分配を図る前者の一般的政策に加担するという点で，まさにその名に値するわけである。紛らわしいので，以後，両者を区別

するため，前者の意味で用いられていると思われるときには括孤づきで表現することにする。

さて，以上のことを確かめたうえで，つぎに，非妥協的マルクス主義者と大衆的社会主義者との関係について，パレートの説明を見ておくことにしよう。ここでは以下のような重要な関係が指摘されている。

まず，パレートは，非妥協的マルクス主義者を革命的社会主義者と言い換えたうえで，社会主義者が，革命的社会主義者だけだとしたら，ほとんど恐れるに足りない。われわれの社会の基盤を掘り崩すのは，むしろ，大衆的社会主義者の方だと言うのである。大衆的社会主義者は，かれら特有の主張ゆえに，革命的社会主義者の犠牲者となる財産所有者に衝撃を与えない。それどころか，これらの財産所有者を魅きつけ，その抵抗を眠らせる。また，大衆的社会主義者はこれらの有産階級に属する非常に多くの人びとを反逆者に仕立てあげる。大衆的社会主義は，こうした反逆者を含めて革命的社会主義者の新しい帰依者を育成する温床の役割を果たしていると言うのである。

パレートは続ける。このような大衆的社会主義者のなかで「もっとも数が多く，また，もっとも有害な」のが急進的社会主義者である。なぜ有害なのか。それは，かれらが，もっとも大きな害悪を流すエゴイズムの一種ともいうべき「連帯」を主張しているからであると（OE IV 326-327, 334-335）。

以上，要するに，大衆的社会主義は，革命的社会主義の予備軍であること，前者は後者と違って人びとの拒絶反応を引き起こさないところから，人びとに浸透しやすい。したがって旗幟鮮明な後者に較べて影響力が大きく，社会の土台をいつの間にか切り崩すという点で，後者よりもはるかに危険な党派である。なかでも社会的連帯を説く急進的社会主義者が，もっとも危険だと言うのである。

社会主義の脅威

『社会主義体系』を執筆していた1900年前後のパレートの論説には，社会主義の脅威にたいする危機感が滲みでている。いわば，その論調には切迫した危機感と支配層の対応へのいらだちを反映したと思われる，ある種の熱気が感じられる。

以下，1899年末から，革命的社会主義者が社会党の多数派を制するようになる1904年にかけて書かれた，こうした論説を見ていくことにしよう。この時期の論説の特徴としては，1）前記の革命的社会主義と大衆的社会主義という二つの党派についての評価を基本にした分析と，2）これらの社会主義の脅威を前にした支配階級（ブルジョワジー）の無力な対応にたいする非難の二つが挙げられる。

まず，これらの分析では，前記の大衆的社会主義が，妥協的とか合法的社会主義，あるいはブルジョワ社会主義と表現され，これに非妥協的社会主義が対置させられる。そして，現状では，これらの妥協的社会主義が支配的であるが，やがては非妥協的社会主義者が，これらにとってかわり，支配的になるだろうという見通しが語られている。

パレートは1891年に，すでに社会主義の潮流の高まりを予想して，「経済学者雑誌」のなかでつぎのように述べている。すなわち，労働者の多くは，今でこそ，何も考えてはいないが，社会主義者の宣伝によって，ちょうど潮流のなかの砂洲のように，たえず少しずつ押し流されて，やがては皆が社会主義の潮流にさらわれてしまうだろうと（OE IV 81）。

この予測はさらに8年後の1899年12月の「経済世界」に寄稿した「社会主義的潮汐」のなかで確かめられ，パレートは「ゆっくりと，しかし確実に社会主義の潮が，ヨーロッパのほとんどのすべての国々に満ちてきていることは明らかである」と書いている（OE VI 162）。

そして翌1900年3月の「社会主義の脅威」では，社会主義が勝利するだろうという見通しが述べられている。パレートは，このなかで，今や「ローマ文明が消滅してヨーロッパに中世の暗闇が拡大した」のに匹敵するような経済革命へと導かれていること，しかもこの革命は不可避であることを明らかにしている。このことは，同年7月の「社会学的理論の応用」のなかでも再確認されている (OE XXII 186)。また，1900年11月の論説では，ナショナリストを除いて，社会主義者には，これといった主要な反対者がいないこと，しかも，そのナショナリストの左派も，いつの日にか，おそらく社会主義に吸収されるだろうと見て，「社会主義者は，たしかに一時的に敗北するかも知れないが，しかし，結局，かれらは勝利するだろう」と述べているのである (OE VI 168)。

さて，この場合，最後に勝利する社会主義者としてパレートはどの党派を想定していたのだろうか。結論を言うと，それは非妥協的な革命的社会主義者であった。パレートは，ここで社会主義の潮流を二つに大別して，それぞれの役割を考察している。その二つというのは，妥協的社会主義と非妥協的社会主義である。パレートは，場合により，前者を人道的社会主義，後者をマルクス主義とも表現している。

まず，この人道的社会主義者つまり妥協的社会主義者について，パレートはつぎのように説明している。かれらは，フランスで勝利を収め，ドイツでは闘いを有利に保っている。かれらは時機を得ているという点では正しいように見受けられる。このお人好しの社会主義者たちは，社会革命について語り，民衆をブルジョワジーにけしかけて，私的資本の破壊を説いている。かれらはフランスでは政府に多大な影響を及ぼすに至っている。しかし，かれらの「社会革命はレトリックの花でしかない」。かれらは，その影響力を自分たちや，仲間の利益以外に役立てているようには思えないからだ。パレートは，このように述べて，この妥協的社会主義者を，こう評価している。

「本当のところ，かれらは破壊したいと言っている，そのブルジョワ社会に寄生して生きているのである。注目すべき一つの事実は，まさに，これらの妥協的社会主義者の領袖たちのすべてが，お人好しのブルジョワに属しているということである」(OE VI 229)。

このお人好しの社会主義者がお人好しであるゆえんは，その人道主義にある。かれらの「すべての理論が蒸発してしまえば，その後には漠とした人道主義だけしか残らない」からである。そして，その人道主義は「紛争の本当の原因をつくり出しているのが野心家たちだということを，非常にまずいことに覆い隠している」というのである (OE VI 251)。

ここで，関連して興味深い事実を紹介しておこう。上記のような指摘がなされた翌年の論説のなかで，パレートは，この妥協的社会主義が合法的な社会主義であるとしたうえで，この社会主義がマルクスの『共産党宣言』のなかで定義されているブルジョワ社会主義の特性をすべて備えていると明言しているのである (OE XVIII 454)。パレートは，すでに見たように，1891年には，ブルジョワジーに有利な分配を図る近代国家の政策を「ブルジョワ社会主義」と呼んでいた。そして，いまや，妥協的社会主義とか連帯を説く人道主義的社会主義を，まさに，その「ブルジョワ社会主義」の片棒を担ぐ党派として，人道主義者や博愛主義者を含むマルクスの規定を援用してブルジョワ社会主義と称していたのである。

この時期に，パレートがもっとも関心を寄せていたのは，急進的社会主義者を含む，こうしたブルジョワ社会主義の動向であった。というのは，パレートは，かれらが現実に政権を握っており，その政策によって，結局は，より革命的な社会主義の露払いの役を果たしていると見て，危惧の念を抱いていたからである。パレー

トは，ブルジョワ社会主義の主張は支配階級の妥協的性格を，もっとも良く示しており，また，この社会主義そのものが革命的社会主義にたいする一つの妥協の産物であると見ていたのである。

さて，それでは，非妥協的社会主義者についてはどうか。非妥協的社会主義にかんするパレートの評価は，かれらが着実な前進を始めた1903年に書かれた論説のなかに基本的に示されている。そこでは，こう述べられている。

「人道主義的社会主義とマルクス主義とを混同してはならない。マルクス主義は，少なくとも部分的には誤っている。しかし，きちんとした根拠にもとづいた一つの科学的学説の特性を，それに認めないわけにはいかない。だから，たんに人道主義的社会主義の何人かの指導者が政府の要人になったからといって，社会主義が飼い馴らされたと信じるならば，奇妙な騙されかたをすることになる……ジロンド党の後に山岳党が続いたように，人道主義者の後には実践的な［生産手段の社会化を主張する］集産主義者が控えているのである」(OE VI 215)。

パレートは，結局，非妥協的社会主義者について以下のように評価していたのである。妥協的社会主義者が，曖昧な教理を主張しているのにたいして，非妥協的社会主義者は部分的には間違ってはいるが，しかし論理的には，より一貫した主張をおこなっている。このように非妥協的社会主義者は理論的な面では妥協的社会主義者より優っているが，実践的な面での比重は小さいように見受けられる。だが，「非妥協的社会主義者は，将来，人道主義者の信念を揺るがすような行動によって条件をうまく整えたとき，おそらく，その償いを得るだろう」。少なくともイタリアでは，非妥協的社会主義者は，そうした時節を待ち受けながら，共通の敵と闘う必要があるときには妥協的社会主義者と結びつくこともあるだろうと (OE VI 201)。そしてパレートは，その将来をこう予測している。

「革命的社会主義の党派［非妥協的社会主義者］が，おそらく勝利するであろう。なぜなら，それは力に訴えることを拒否しない唯一または，ほとんど唯一の党派だからである。開闢以来、力だけが勝利を確実なものにし，力だけが勝利を保持するのである」(OE XVIII 435)。

以上は，二つの社会主義者の対立ならびに妥協的社会主義のブロック内の亀裂があらわになってきた1904年の段階での判断である。パレートは，この事態を，フランス革命の例や宗教における離反と異端の例を挙げながら説明し，これらの分裂は，必ずしも社会主義の勢力の低下につながるものではなく，逆に，その活力を示すものであると見て，上記のような見通しを述べていたのである (OE VI 247, 250)。いずれにせよ最終的には，妥協的社会主義者ではなく，非妥協的社会主義者の党派が勝利を収めるだろうというのが，当時の社会主義運動の動向にかんするパレートの見通しなのであった[4]。

退廃した支配層の対応

さて，以上のような社会主義者の分析とならんで，1899年から1903年に書かれた論説で目につくのは，社会主義運動の高揚に直面した支配層の対応の仕方にたいして論難が繰り返されていることである。これらの論説では，社会主義者によって自らが収奪されることについて，見る眼も聴く耳ももたない支配層（ブルジョワジー）への非難がリフレィンのように繰り返されている。

4）1899年頃までのパレートは折に触れて革命的社会主義者の「試実さ」を指摘している (OE XVIII 79, XVII 887, VI 163)。

「現代の退廃したブルジョワジーは，まったく盲目で，歴史が繰り返し教えているにもかかわらず，危険がどこからやってくるかがわからないのである」(OE VI 230)。

「社会主義者と闘う勇気のないブルジョワジーは，いまや自分たちの権力を否定する言葉を［味方の］合言葉と取り違えたのである。ブルジョワジーは自らすすんで眼をふさぎ，社会主義者が少しも危険でないということを自分にも他人にも言い聞かせようと努めている……ブルジョワジーが自分を脅かしている危険に自らすすんで眼をふさぎ，自分を救うために自分自身の気力ではなく，敵方の不和を当てにするとき，それは一つの社会にとっては，切迫した凋落の兆候なのである……かれら（ブルジョワジー）は自己防衛がまだ可能であるにもかかわらず，そのことを知らないし，知ろうともしない。かれらは自殺しつつあるのだ」(OE VI 164-165)。

このように支配層は社会主義の危険にたいして無知であり，無防備であるばかりでなく，それどころか，自分たちの首を締める社会主義者の手助けまでしてやっているとパレートは非難する。

「社会主義者は，もし他の援助がなかったならば，おそらく無力であっただろう。かれらに道を拓いてやったのは，まさにブルジョワジーなのである。ブルジョワジーの成員の一部が社会主義者と闘うかわりに，危険に直面することを避け，かれらの敵を助けることを正当化するためにくっつける理由は，ときには喜劇的ですらある……社会主義者のライオンが，それを飼い馴らしたものと錯覚して生活している人間を貪り食う日は，おそらく遠くはあるまい」(OE VI 169)。

そして，このように自衛する知見とエネルギーを喪失した支配層にたいして，パレートはつぎのような言葉を投げつけているのである。

「率直に言って，私は自分を守ることを知らない，優柔不断で無気力で，愚かしくも感傷的な人間を深く尊敬する気にはなれない……社会的連帯の名のもとで，自分の財産が奪われ，自分の子供たちが貧乏につき落とされるというときに，その社会的連帯の賛美歌を歌うような，血の気の失せた人間が存在することがあっていいのだろうか」(OE VI 163, 164)。

社会主義者との統一行動

1898年5月6日から7日にかけて，パン代の値上がりを契機としたミラノの民衆の暴動は，血の弾圧を招き，社会主義者の中心的メンバー全員を含む多数の逮捕者と亡命者を生む事態が発生した。この事態をきっかけとして，パレートは自由主義者として，一時的ではあったが，社会主義者とともに政府に反対する共同行動をとるに至った。そこで，このような共同行動に見られるパレートの現実的対応と社会主義論との関連を，つぎに見ておくことにしたい。

当時，スイスに居を構えていたパレートは，この事件の10日後の同年5月16日にパンタレオーニに宛てた手紙のなかで，イタリアにおいては，パレートにとっても，パンタレオーニにとっても，やるべきことは何もないとしたうえで，自分たちと意見を同じくするものは，猫の子一匹もいないと述べて，「イタリアでは，1）統治する泥棒，2）社会主義者，3）聖職者という三つの党派があるが，こいつらの，どれ一つとも一緒にやっていく気はしない」。したがって自分は純粋科学に専念するから，君も，そうした方がいいと記している（LP II 196-197)。

ところが，イタリアからの最初の亡命者がスイスに到着するとともに[5]，パレートの無関心の

5）パレートは，社会主義者のラブリオーラを含む，さまざまな思想的立場の亡命者を，モン・ペノン

装いは捨て去られる。この変化について「自由が嘲笑されたという想いが自由主義者パレートを蘇らせたのだ」とブズィーノは述べている[6]。

ともあれ，パレートは，まず，モリナリや，パレート自身の1880年代の論文の再録を含む小冊子『経済的自由とイタリアの非常事態』を発行して，事件をめぐる政府の対応に憤慨と抗議の意志を表明する。この小冊子の公刊は，友人の社会主義者フィリポ・トゥラーティに抱いていた友情と無縁ではなかったと言われている[7]。事実，社会主義者への接近はつぎのようなパレートの行動に現れている。まず，迫害された社会主義者への連帯を表明するため，それまで断ってきたイタリア社会党の機関紙「前進」(Avanti!)を年間予約している[8]。ついで，1899年にはトゥラーティの主宰する「社会批判」(Critica sociale) 誌に，「なぜ，われわれは統一するのか」と「自由主義者と社会主義者」という二つの論文を寄稿している[9]。

このような行動に示される自由主義者としてのパレートの，ミラノ事件にたいする評価は，前記の小冊子の主張から明らかである。パレートによると，イタリアの非常事態は，結局，イタリアがとってきた国家主義や保護主義，誇大妄想，そして，これらと結びついた軍国主義の結果であった[10]。こうした政策が，思想，学問，言論，出版，営業などの自由を抑圧し，課税による財産の侵害をもたらしたのであるというのである[11] (OE XIV 1-9)。

以上，パレートはミラノ事件を契機として社会主義者との連帯を強めるが，しかし，それはあくまでも，自由主義者としての実践的立場からのものであった。このようなパレートの立場は，事件の翌年の9月に前記「社会批判」に書かれた論説のなかに明瞭に示されている。パレートは，そのなかで，「政治においては，抽象的原理にかんしてではなく，実際的行動面で自由主義者と社会主義者とは一致できる」と主張していたのである[12]。そして，この主張に続いて，パレートはこう述べている。

「イタリアばかりではなく全ヨーロッパで

の麓の小さな家に快く受け入れている。玄関や寝室には簡易ベッドがしつらえられ，客間も共同寝室となり，雨露をしのぐ場所でありさえすれば，庭の物置であれ，園丁の番小屋であれ，ベッドが用意された。それでも亡命者は引きも切らずにやってきたという。[6] p. 163。

6) [1] p. 15。

7) [1] p. 15。なお，この小冊子の1970版にはブズィーノの序文とともにパレートの，トゥラーティとその母親宛の，1893年から1899年の間に書かれた珍しい手紙，計9通が収録されている。パレートとトゥラーティとの交友関係は二人が1893年3月から4月にかけてミラノで出会ったところから始まる。その関係は，トゥラーティの母親宛の手紙に明記されているように，私的なものであった (OE XIV xx)。

8) この「前進」紙は1823年のパレートの死に際して，その論説のなかでパレートに「ブルジョワのカール・マルクス」という賛辞を呈しているという。[2] p. 23, n. b. 1。

9) パレートは，事件前の1897年に、すでに「強制的指定居住地」法案を批判する論説をこの雑誌に寄稿している (OE XVIII 222-228)。

10) パレートは1896年に「社会主義の二つの重要な水源は軍国主義と保護主義である」と述べている (OE XVIII 86)。軍国主義というのは，アビシニア戦争，マッサウア遠征，そして鉄道の軍事化に示される政策のことであった (OE XIV 2-4)。

11) 他方，パレートは，1899年に，このような国家の政策が，社会主義とりわけ革命的社会主義の覇権への道を切り開いているという見解を，はっきりと打ち出している。パレートは，社会主義の潮流の高まりは，累進課税に見られるような経済的自由の抑圧や，社会的と称する規制による個人的自由の侵害といった支配階級の政策に直接起因していること，そして，このような「国家の社会主義」つまり「ブルジョワ社会主義」が革命的社会主義への道を切り開いていることを指摘し，そのうえで「梨の実が熟したとき」それを摘みとるのは，実際には，これらの社会主義者たちなのだと警告している (OE VI 162, IV 232)。

12) なお，このように社会主義者を評価したうえで，パレートは，つぎのような自らの立場を改めて表明している。「このようなことを言うのは，たんに事実を語っているにすぎない。私は，けっして社会主義者にはならないし，マルクスの理論に反対して書いたことの一言たりとも取り消したりはしない」と (OE XVIII 323)。

奇妙な現象が観察される……社会主義者が自由のために闘っており，自由主義者が放棄した部署を社会主義者が引き継いでいる……理論はともかくとして事実において，ヨーロッパでは，ほとんど社会主義者だけが支配者の圧政にたいして有効な抵抗をおこなっており，ほとんど，かれらだけが愛国者の迷信と闘っているのである」(OE XVIII 322-323)。

結局，パレートを社会主義者との共同行動へと駆り立てたのは，自由の擁護という自由主義者としての実践的要求であった。現に失われ，そして失われつつある自由の擁護，これこそが，パレートを社会主義者との統一へ導いた，唯一の根本要因なのであった[13]。

社会主義への不信

それにしても，パレートの側から投げかけた社会主義者との連帯の絆は，けっして強靱なものではなかった。その絆の芯は社会主義者への不信によって蝕まれていたからである。その不信は，1900年の論文のなかで，つぎのような疑問のかたちをとって表明されている。「抑圧されている正統的社会主義者は，今日，自由を要求している。だが，かれらが明日，主人公となったとき，かれらはその自由を，われわれに与えるだろうか」と (OE IV 339)。

この不信を裏づける，もう一つの注目すべき事実は，社会主義者との統一を説く前記の論説を1899年に「社会批判」に寄稿する一方で，これと並行して，すでに紹介したような，所有制度の変革を図る社会主義者の危険性を説く数多くの論説を書いていたということである。つまり，パレートは，社会主義者との統一を主張しながら，それ以上に精力的に，社会主義の脅威を繰り返し訴え続けていたのである。

パレートは何よりもまず自由主義者として，自由の抑圧にたいする反発を心底に抱いて，自由を拘束する政府への対応を考えたのであろう。そして，その対応の一つとして社会主義者との統一行動を決断したものと思われる。したがって，結局，ミラノ事件を契機にしたパレートの社会主義者との統一行動は，当時の状況のもとでの，自由主義者としての政治的判断によるものと言えよう。

同様に，抑圧されている社会主義者にたいするパレートの態度も，抑圧された者の自由は，たとえ社会主義者の自由と言えども擁護するという自由主義者の信念によるものであった[14]。こうした社会主義者にたいするパレートの対応の基本となっていたと思われる一般的見解は，1901年のモリナリ宛に書かれた文書のなかに，はっきりと示されている。そのなかでパレートは「真の自由主義者」の信条とは，自由の抑圧にたいしては，たとえ，それが，自分と意見を異にする者にたいするものであっても，宗教的，哲学的，科学的立場を問わず，断固として，その自由を擁護するというものであると明言している

13) 社会主義者を含む統一の一般的根拠を，パレートは「なぜ，われわれは統一するか」のなかで明らかにしている。それは，国のために何の役にも立たないことがらに税金を払っていることを不快に思っている，さまざまな信念や理論をもった人間が，自分のものを守るために，実際的，合法的そして真摯な観点から関係を結び，統一するのは当たり前であるというものである (OE XVIII 316)。

14) このことは，1898年5月25日付のパンタレオーニ宛の手紙からも窺える。そこには，こう書かれている。「ミラノでガンバロッタという人物が逮捕された。数月前，われわれは，かれに学位を授与している。かれは，理論的社会主義者で，騒乱のなかで何の役割も果たしていないことは確かだ……騒乱によって法律が発布されるだろう。その法律は，どんなものであっても盗っ人［政府］に都合がよく，誠実な人間を沈黙させるものだ……イタリア政府の唯一の口実は，もし社会主義者が勝利したら，かれらは最悪のことをやるだろうというものだ」(LP II 198)。

同様の見解は，つぎのようなパレートの説明のなかにも示されている。イタリア政府が社会主義者であるという口実で，古代史を専攻している学者から教授の地位を剝奪しようとしたとき，「教育の自由にたいする，この侵害を非難することが自分の義務であると私は信じた」と (OE IV 342)。

のである（OE IV 340）。

われわれは，ここで改めて，1891年の論説でパレートが社会主義を拘束主義のなかに含めたうえで，その反自由主義的性格を指摘していたことを想起しよう。そこでは社会主義は「国家権力の増大と個人の自由の縮小を図りながら」所有の基礎の変革を目指すものとされていた。

社会主義は自由主義とは根本的に相容れないというパレートの1891年の見解は，社会主義者との共同行動の時期にあっても，やはり基本的に変化してはいなかったのである。当時「社会主義の職業的反対論者」[15]と目されていたパレートの，一見，矛盾した言動を支えていたのは「真の自由主義者」の信念なのであった。

社会主義運動の展望

1906年の論説になると，ドイツ，フランス，イタリアにおける［妥協的］社会主義の弱体化が指摘される一方，サンディカリズムへの言及が見られるようになる。サンディカリズムの理論的特性として，パレートは，1）階級闘争にかんするマルクスの思想への回帰，2）社会の完全な変革，3）人道主義的，退廃的な社会主義によっては満たされない欲求の表明という3点を挙げている。そして，「事実を冷静に研究し，党派や情念にとらわれない人間であれば，だれでも社会組織の崩壊が，ゆっくりと，たえまなく進行している」ことが理解できるはずだとして，こう述べている。「われわれは未来に向かって進んでいる。われわれは，ほとんど，その大筋しか見通せないが，それが平和的な人道主義者たちが熱望し，夢見ているものとは，まったく別の未来であることだけは確かであろう」と（OE VI 267-268）。

このような見方は，当時のパレートが，いわゆる革命的サンディカリストによる社会変革の可能性を予見していたことを窺わせる。そして，この見地は1916年の『一般社会学概論』のなかにも引き継がれている。

> 「サンディカリストとアナーキストは，しだいに，さまざまな多くの社会主義者にとってかわるだろう。そして前者の後継者が，われわれの社会を退廃から救うだろう。カエサルやオクタヴィウスの軍団が（力によって）ローマ社会を破滅から救ったように」（TR 1859）。

ここには，退廃した支配階級への絶望に裏打ちされたパレートの，サンディカリストたちへの皮肉な期待が読み取れる。その3年後の1919年に書かれた論説，たとえば「ボルシェヴィキ現象」になると，もはや，われわれが目にしたような1900年前後の張りつめた危機感は，ほとんど看取できなくなる。その論調には，懐疑的，傍観者的な雰囲気が漂っているのである（OE XXI 187-189）。

15）これは，1904年の哲学国際学会の紹介記事のなかでの，E.アレヴィーの評価である。［7］p. 1112。

参照文献

1）Busino, Giovanni, *Pareto, Croce les socialismes et la sociologie*, Droz, 1983.
2）Bousquet, G. H., *Vilfredo Pareto, sa vie et son oeuvre*, Payot, 1928.
3）Pareto, Vilfredo, *Lettere a Maffeo Pantaleoni*, tome 2, 1962.
4）Pareto, Vilfredo, *Œuvres Complètes*, Droz
IV. *Libre-échangisme, protectionnisme et socialisme*, 1965
V. *Les systèmes socialistes*, 1965
VI. *Mythes et idéologies*, 1966
XII. *Traité de sociologie générale*, 1968
XIV. *La liberté économique et les événements d'Italie*, 1970
XVII. *Ecrits politiques*, Vol. 1, 1974
XVIII. *Ecrits politiques*, Vol. 2, 1974
XXI. *Faits et théories*, 1976
XXII. *Ecrits sociologiques mineurs*, 1980
5）Procacci, Giuliano, *Storia degli italiani*, vol. 2, Laterza, 1980.
6）Racca, Vittorio, *Working with Pareto*, Cahiers Vilfredo Pareto, tome, XVI, no. 43, 1978, p. 163.

7) Revue de métaphysique et de morale, t. XII, 1904.

8) ブロカッチ著，豊下楢彦訳『イタリア人民の歴史 II』（未来社）1984年.